

平成30年度 日本大学付属高等学校等
高1 基礎学力到達度テスト

国 語



注 意

- (1) 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- (2) 試験開始後、問題冊子に不備(印刷不鮮明な箇所、ページのふぞろい、汚れ等)があつたら申し出てください。
- (3) テスト問題は□から⑤までです。
- (4) テスト時間は六〇分、一〇〇点満点です。

《マーク式解答欄記入上の注意》

解答用紙への記入に際しては必ずHBの黒色鉛筆を使用し、解答用紙の所定の記入欄以外の部分には何も書いてはいけません。マークを訂正する場合は、プラスチック消しゴムできれいに消し、マークし直してください。解答用紙は、絶対に汚したり、折りまげたりしないでください。

解答 番号	解答マーク欄
10	① ② ③ ●

良い 例	悪い 例
	 うすい ぬり不完全 丸囲み不可

クラス番号	クラス出席番号	氏 名
<div></div>	<div></div>	<div></div>

国

語

— 1 —
次の各問いに答えなさい。

問1 湯桶読みをする熟語として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 垣根 2 夕食 3 実験 4 本物

問2 部首が異なる漢字の組み合わせとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 人・使 2 志・慕 3 育・脳 4 吹・回

問3 類義語の関係の組み合わせとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 必然——必要 2 誠実——名実
3 風情——情趣 4 分析——分解

問4 次の言葉は「一つのこと」に集中して他に気を散らさないこと」という意味の四字熟語になる。空欄部に入る言葉として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 一心
1 両断 2 不乱 3 気鋭 4 直入

問5 次の二つの空欄部に共通して入る言葉として、最も適切なものを一つ選びなさい。

*私は彼の将来性を ことにした。

*人の恨みを ことはしない方がよい。

- 1 打つ 2 引く 3 買う 4 持つ

問6 「人間の幸・不幸は前もって知ることができない」という意味の故事成語として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 他山の石 2 杞憂
3 画竜点睛 4 塞翁が馬

問7 品詞が他と異なる「ない」として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 昨日買ったりんごはおいしくない。
2 今後の予定は決まっていない。
3 この辺りはあまりにぎやかでない。
4 まだそんなに眠くない。

問8 『山椒魚』『黒い雨』を著した作家名として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 井伏鱒二 2 菊池寛 3 志賀直哉 4 太宰治

問9 外来語とその意味の組み合わせが誤っているものとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 タイムラグ——時間差 2 ポジティブ——積極的
3 レファレンス——参考 4 ノンフィクション——虚構

問10 次の漢詩で、対句になっている句として、最も適切なものを一つ選びなさい。

3	1	何日 いづレノカ	是看 コレミすみす	又過 ミすみす	年 ナラン	…… 結句
	2	起句と承句	承句と転句	…… 結句	…… 結句	…… 結句
	3	転句と結句	起句と結句	…… 結句	…… 結句	…… 結句
	4	起句と結句	起句と結句	…… 結句	…… 結句	…… 結句

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい（設問の都合で省略した部分がある）。

インターネットの発達により情報環境は激変した。私たちが日々接する情報量は増え続け、膨大な量の情報処理を仕事でも求められるようになってきている。

世界中の知識、情報にアクセスできる環境は整ってきた。しかし、一人ひとりの教養がたしかに充実したものになってきたか、ものごとの判断力は向上したか、生の不安を乗り越えて生き抜いていく強い精神力を身につけたかといえ、少々心もとない。

「検査すればあらゆる情報が引き出せる」という安心感は、ともすれば知を自分の身についたワザとして捉えにくくする。諸々の情報は自分の外側に膨大な水量の大河となつて流れていて、その川の水（情報）を必要に応じてすくって使う。いらなくなれば川に戻す。これは大変便利だが、自らの精神の核を形成することにはなりにくい。

精神の核といえるものを自分の身のうちに形成するためには、出会いが必要だ。「この出会いがなければ今の自分はない」といえる出会いは、現実の生活においては実感しやすい。しかし、この質の出会いを本との関係で持つには、読む側の構えが求められる。便利に使い捨てできる情報と接するのとは異なる、こちらの体重をかけた読みの構えが出会いの質を高くする。

古今東西の名著とされる書物には、精神の核を形成してくれる力、生命力がある。しかし、その生命力は、堅い殻におおわれた種子のようなものだ。殻を破り、種子を土壌で育てる必要がある。その作業は骨が折れるようだが、人生という長さで見るとコストパフォーマンスは、むしろいい。この精神の作業をなす力が古典力だ。

情報の新陳代謝の速度が急速に上がってきた現代において、⁽²⁾古典はむしろ価値を増してきている。移り変わる表層の景色に目を奪われ、「自分は

大丈夫なのか」と不安になり浮き足立つ。そんな時、百年、千年の時を超えて読み継がれてきた書物を読むことで、「ここに足場があった」と自信を持つことができる。

絶対の真理などはないのかもしれない。しかし、かなりの程度「妥当」だと思える考え方はある。ニュートンの力学は、アインシュタインの相対性原理によって唯一無二の絶対性は失ったかもしれないが、妥当性は維持している。非ユークリッド幾何学にとつてユークリッドの『原論』は古典だ。約二千五百年前の『論語』は人間の本性の変わらなさや持つべき心のあり方について、相当程度の妥当性をいまだに持ちつづけている。

古典を数多く自分のものとすることで、この「妥当性の足場」をたしかなものにしていくことができる。一つの古典でも、読み込み方が深ければ、この世を生き抜くための助言を、その中から数多く見つけることができる。素手で地中深くに埋まっている宝石をつかみとろうとする勇氣と粘りに応じて、宝石の量は増す。

グローバルに情報が行き交うようになってはきたが、民族間、宗教間、国家間の緊張は必ずしもカン和していない。⁽³⁾価値観の多様性を受け容れる知性の力が、他者に対する寛容さとなる。

世界はこれから、他者理解に基づく寛容さの方向に行くのか、それとも理解を拒絶した不寛容の方向に行くのか。この方向性を左右する重要な鍵が古典力だと私は思う。

多様な価値観を理解し受容するには知性が求められる。数々の古典を自分のものとしていくことで、この知性が鍛えられる。自分の好き嫌いや不快だけで判断せず、背景や事情を考え合わせ、相手の考えの本質をきちんと理解する。この深みのある思考力が知性だ。

古典を読むと、思考に深みが出てくる。骨太な思考力、想像力が古典の

中には埋まっている。それをかみくだくように読み込んでいくと、読むこちらの思考も掘り下げられてくる。深い思考のテキスト（書物）は、思考の垂直的な深さの感覚を刺激してくれる。日常の思考は他愛もないことが多い。他愛もないことを語り合い、メールし合うのは人生の大切な楽しみではあるが、それが生活の大半を占めているのでは、深みのある思考力が育ちににくい。

古典は、その一つひとつが強烈な個性で屹立している。*きつりつ それぞれの古典は自分の足で立ち、自らがその思考の根拠となっている。要するに、小手先の借り物では垂流でしかなく、時の審査に耐えて「古典」と認められることはない。

古典はみな本来強烈な個性で極彩色に光輝いている。しかし、時が隔たっていたり、著者の思考が深すぎたりして、現代の私たちの感覚からすると、むしろ地味に見えてしまいがちだ。しかし、これは錯覚である。

近年の研究で、寺院の仏像や壁画の中には、実は極彩色であったものがあることが明らかにされた。CG（コンピュータ・グラフィック）で復元されたその様子は地味なものというより、日常では目にしないほど鮮やかな色で、極楽浄土への希望を感覚的に呼び起こすものであった。あるいは荘厳さで胸をかきたてる刺激的な存在であった。

古典力は、この復元作用に似ている。ほこりかぶったように見える古典を現代のテキストとして読み直すことで、色が鮮やかによみがえる。自分の問題に引きつけて古典の文章を読むことで距離が縮まる。時の隔たりが一拳に縮まる感覚は、古典ならではの興奮だ。

（齋藤孝『古典力』）

（注） *コストパフォーマンス＝要した費用とそれによって得られた成果の割合。少ない費用で多くの成果が得られる場合のことを、「コストパフォーマンスがよい（高い）」という。

*屹立＝高くそびえ立つこと。

問11 波線部③のカタカナと同じ漢字を使うものとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 経費をサク減する。
- 2 遭難者を捜サクする。
- 3 政サクを実行する。
- 4 労働者をサク取る。

問12 波線部⑥のカタカナと同じ漢字を使うものとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 辞任をカン告される。
- 2 トンネルがカン通する。
- 3 カン急自在に動く。
- 4 カン例に従って行う。

問13 傍線部(1)「自らの精神の核を形成することにはなりにくい」とあるが、その理由として最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 諸々の情報は膨大な水量で流れる大河のようで、必要に応じてすくいとって使うことが難しいから。
- 2 必要な情報を容易に出し入れできる便利さよりも、精神の核を形成するには出会いこそが必要だから。
- 3 精神の核を形成するために必要な質の高い出会いを、膨大な量の情報の中に求めても得られないから。
- 4 便利に使い捨てできる情報は自分の外側を流れていて、精神の核を形成する力を持っていないから。

問14 傍線部(2)「古典はむしろ価値を増してきている」とあるが、どういった点に価値が見いだされているのか。その説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 情報の新陳代謝が急速に行われて絶対の真理が否定されていく中で、古典だけが真理の存在を証明してくれる点。
- 2 急激に変化する情報ばかりあふれる現代にあって、古典だけが百年、千年の間人々に読み継がれてきている情報である点。
- 3 情報の新陳代謝の速度が速い表層の現象面に目を奪われている現代人に、古典は内面に注目することを促している点。
- 4 現代の目まぐるしく変化する情報環境の中で、長く読み継がれてきた古典は確かな拠り所を与えてくれる点。

問15 傍線部(3)「価値観の多様性を受け容れる知性」とあるが、それはどのような力か。その説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 どんな民族、宗教、国家が相手であろうと、寛容な態度で接するか不寛容に接するかの方角性を決める鍵となる判断力。
- 2 民族間、宗教間、国家間の緊張をゆるめるために必要な助言を、勇気と粘りをもって古典の奥深くから選び取る判断力。
- 3 古典の中に埋まっている骨太な思考力や想像力を読み取ることのでられる、他者を理解することのできる深みのある思考力。
- 4 相手を感情や気分だけで判断せず、相手の置かれた状況を考え合わせ、相手の考えの本質を理解することができる思考力。

問16

傍線部(4)「古典は、その一つひとつが強烈な個性で屹立している」とあるが、この指摘から始まる筆者の主張として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 古典には筆者自身の深い思考が含まれていて、現代の目からは地味に見えても、自分の問題に引きつけて読み直すべきだということ。
- 2 古典が古典として認められるのは筆者自身の本物の思考が含まれているからであり、それゆえに極彩色に光り輝いて見えるということ。
- 3 古典に含まれる筆者の個性がどんなに鮮やかによみがえったとしても、現代人の感覚には地味なものに見えてしまいがちだということ。
- 4 古典の価値は強烈な個性が極彩色に光り輝く点にあるのだから、ほこりをおぼえて見える時にこそ読み直すべきであるということ。

問17

本文の内容と論の進め方についての説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 情報化が進むにつれて古典が軽視されるようになった現状を批判した文章で、古典の読み方を具体的な例を挙げて説明することによって古典の重要性を示すことで、平易な展開になっている。
- 2 情報が満ちあふれた現代社会にあって古典の持つ価値はどのように評価されるかを明らかにした文章で、いろいろな観点からそれを読む効果を具体的に挙げることで、迫力のある展開になっている。
- 3 情報化が進んだ現代における古典の重要性を述べた文章で、古典の性格、それを読む意義などの論点を明示しながら比喩や事例を加えて順序よく説明を進めることで、説得力のある展開になっている。
- 4 情報の変化が著しい現代にあって古典だけが読み継がれてきている理由を考察した文章で、古典を読んで得られるものを誇張を交えた表現で列挙することで、印象的な展開になっている。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

その声は、ふいに正三しょうぞうの頭の真上で聞えた。

それは、うれしくてたまらないような、本当にかわいらしい声であった。その声は、正三の頭の真上の空から、いきなり動き出したぜんまい仕掛のおもちゃの自動車か何かのように、勢いよく鳴り出したのだ。

それを聞いた時、正三は思わず立ち止とまって、

「あ、あのひばりの子だ」

といった。

そういつて、大急ぎで空を見上げたのである。

青い麦畑の中の道である。春休みになってからずっと雨ばかり降り続いて、正三はすっかり閉口していたのだ。

正三はこんどから小学四年生。妹のなつめは二年生、一番下の四郎はあと二年しないと幼稚園へ行けない。

そのなつめと四郎は、今日は朝から村田さんのお家へ遊びに行ったきり、昼になるのに戻って来ない。久しぶりのお天気なので、二人ともそれぞれ夢中になって遊んでいるのだ。

（なつめのやつ、宿題もしないで、いい気になっているな）

お母さんから呼びに行くようにいわれて家を飛び出して来た正三である。四年生ともなれば、宿題もたくさんある。なつめのような二年坊主とは、ちよつと違うのだ。

正三の家から村田さんの家までは、畑の間の一本道だ。その道は、ゆるやかに曲まがりながら、遠くに森や雑木林や竹やぶや、それらのかげにある農家や、ところどころに新しく建てられた住宅を一目に見渡しながら、村田さんの家のすぐ横へ続いているのだ。

いつもこの道を通して、正三となつめは学校へ行くのである。

青い麦畑の真中で、大急ぎで空を見上げた正三は、太陽の光りがまばゆ

くて、ちよつと手をかざしてみた。

すると、ちようど頭の真上のあんまり高くはないところに飛んでいる一羽のひばりが眼めに入った。

それは、大変せわしそうにさえずりながら、その声と全く同じくらいのせわしさで、小さな羽根を動かして、まるでやっとなき空に引っかかっているというふうに見えた。

そのひばりの飛び方を見ると、あれだけせわしく羽根を動かさないことには、たちまち、真っさかさまに落ちてしまふ、といわんばかりなのだ。

広い空の中で、それは小さくなって使えなくなった消しゴムくらいの大さきの、黒い粒となって、今にも落っこちそうに、たよりなく震えながら動いてゆくのであった。

正三は、その黒い粒をじつと見ている。

（あれは、ひばりの子だ。きよう、はじめて空へ飛び上あがったんだ）

正三は、そう思った。

（あの飛び方を見れば、分わる。あれは、ついこの間まで、まだ指くらいしか伸びていない青い麦の中で、かわいい声で鳴いていたやつだ）

その雛ひなのすがたを、正三はいち度も見かけなかったが、その雛が鳴いていた声は、はっきり覚えていた。

その声を聞いたのは、たった三回で、それを聞いた場所も、その度ごとに違っていたが、それはだいたいこの辺りの畑の中であつたのだ。

「ひばりの巢は、探してはいけないよ」

いつだったか、父がそういったことがある。あれはまだ正三の家族が大阪に住んでいた時分のことであつた。幼稚園に行っていた時であつたから。

正三の家は、電車の停留所から五分くらいのところにあつて、まわりは

家が詰^{*}んでいたが、裏の方へ向^{むか}って歩き出すと次第に空地や草原が多くなり、二十分も歩くと、畑のあるところへ出て来るのであった。

父は日曜日など、気が向いた時には、正三やまだ小さかった妹のなつめの手を引いて、でたらめに畑の見えるあたりまで散歩に連れて行ってくれた。そんなある散歩の時に、ひばりの声を道のそばの探せばすぐ見つかりそうなところに聞いて、巣を見つくと父にせがんだことがある。

その時に、正三は父からいわれたのだ。

「どうして、いけないの」

⑨ 不服らしく正三がそう聞くと、父は、

「いや、どうしてということはないけれども、それはしてはいかんのだ」といつて、あとは何もいわずにずんずん子供たちの手を引っ張って、畑中の道を歩いて行った。

その時、正三は父がなぜひばりの巣を探してはいけないというのか、そのわけがはつきりとは分らなかったが、ただぼんやりとそれがいけないことだということを父の言葉の調子から感じた。

ひばりの巣を探し出したいという気持^{きもち}は、いまの正三にだってある。大ありだ。

いまなら正三は、父に頼んだりはいしない。もし探す気なら、自分で探して見せる。ただ、ひばりの巣を探したくても、可哀そうだから、しないだけだ。

正三が三回、まだ小さい麦の中で可愛く鳴いているのを聞いたひばりの子が、今、あんなにうれしそうにさえずりながら、生^うれてはじめての空へ飛び上っているのだ。

⑩ 「ほら、がんばれ、落ちるな」

正三は、思わず身体に力が入った。

その時、ひばりの声の調子が、変^かった。

三つくらいの音色を綴^{つづ}ったような鳴き方をしていたのが、二つの音色だ

けになり、それも大へん慌てたように聞え始めた。

「おや？」

と正三がひばりを見つめていると、消しゴムの切れはしよりもっと小さくなっていたその丸い、黒い粒は、それまでは震えながら空に引っかかっていたようなのが、横に一直線に流れて行ったかと思うと、今度はいきなり地面に向って落ちた。

それは、まるでひばりの子が、空から、地面のどこかで見てくれている親に向って、

⑪ 「お父さん、お母さん、もうこのくらい飛べば、及第でしょう。ぼくは、もう死にそうだ。ほら、降りますよ」

と声をかけて、それをいいも終^{おわ}らないうちに、すとーんと空から落ちたような具合であった。

正三はひばりが落ちて行った方に向って、大急ぎで走って行った。

それは、バスが走っている道路の向う側の広い芝生地^{あそび}の真中であつた。そこは冬の間に掘り起して、またならされた上へ、一面に肥^こをばらまいてあつた。芝生屋^{あそび}の地所^{じしよ}だ。

その肥をばらまいた上に、ひばりはんとすまして着陸しているのだ。

「馬鹿なやつだなあ」

正三は、あきれてしまった。心配して走って来ただけに、ひばりが無事なのを見てほっとすると同時に、今度はおかしくなつて来たのである。

「おい、そんなところにじっとしていたら、くさいぞ」

正三がそうどなろうとした時、不意にどこからか石が飛んで来て、ひばりのすぐ近くに落ちた。

いつの間に来ていたのか、バス道路のところに一人の男の子が立っている。正三と同じくらいの大きさの子供だ。

⑫ そいつは、すぐに次の石を拾おうとしてかがみこんだ。

正三は怒った。思わず大声でどなった。

「こらあ。石を投げるなあ」

男の子は、こちらを見た。黙って、じっと正三の方を見ている。

どうも、正三の方を見ている様子は、このままではただでは済ませんぞといった気配が感じられる。

正三とその少年との間は、三十メートルくらい離れている。二人は、にらみ合ったまま、少しずつ近づいて行った。

ちらと芝生の方を見ると、ひばりは石が飛んで来たのに別にびっくりした様子もなく、のろのろと肥の上を歩いている。

ひばりの子に石を投げつけるなんて、なんというひどいことをするやつだろう。

もしもまともに当たったら、どうするのだ。せっかく、生れてはじめて空へ飛び上って、あんなに高いところまで上ることができたというのに。

正三は、とてもふんがいらしたのである。

だが、そのひどいことをした男の子をなぐってやろうなどは、ちっとも考えていない。どなつて、相手が石を投げるのを止めれば、それでいいであった。

ところが、そいつは、石を投げるのは止めたが、こわい顔をして正三をにらみつけながら近づいて来たのだ。こうなると、正三も引き下がることはできない。

衝突するまで進んでゆくだけである。その間に、肥の上を歩いているひばりが、早く逃げてくれればいい。こんなに人の目につきやすい芝生の上なんかで休んでいないで、さっさとお父さんやお母さんのいる麦畑へ飛んでゆけばいいのだ。

正三と石を投げた少年とは、とうとう顔をつき合わせるところまで来てしまった。

「おい」

先に声をかけたのは、相手の少年だ。

「いま、なんていった」

すごい顔をしている。

正三は、始め自分と同じ年くらいと思ったが、近くで見ると、相手はもうも五年生か六年生くらいの大さだ。色が黒くて、とても意地の悪そうなやつだ。

(これは、やっかいなことになったぞ)

正三は、本当いうと、少しこわくなってきた。喧嘩をやれば、向うの方が強いに決まっている。それに正三は、これまで喧嘩というものをしたことがないのだ。

(なぐられるかも知れんな)

だが、正三はやせ我慢を張った。

「石を投げるなといったんだ」

「なに？」

(4) 相手の眼が光った。

「なんだと。よけいな世話だ」

その声を聞いたとたん、正三の眼には相手が急に恐ろしい大人のように見えて来た。

(危い。早く逃げろ！)

正三の頭の中で、そういう声が聞える。

そいつは、じりじりと正三に近づいて来た。正三はいまにもくるりとうしろを向いて走り出したかったが、やっと頑張つてそこに突っ立った。

「あれは、ぼくのひばりだ」

正三は、自分でも思いがけないことをいったのである。

「なに？ お前のひばりだと」

「そうだ。あれは、ぼくが飼っているひばりの子だ。らんぼうなことはないでくれたまえ」

相手は、驚いて正三の顔を見た。

「お前のひばりだと？」

相手の少年は、呆れたようにいった。

「うん。あれは、ぼくのひばりなんだ」

⑥断固としてそういうと正三は、ゆつくりと芝生の方を見て、どうやらひばりはその間に麦畑に無事に帰ったことを確かめると、さっさと家の方へ引き返した。

敵は正三のあとを追っかけて来るかと思つたが、「ちえつ、でたらめいってやがる」といっただけで、向うへ行つてしまった。

正三は、ほっとした。

（ああ、よかった。危いところだったな）

それから、とっさの時に、どうしてあんなことをいい出したのだろうかと思うと、なんだかおかしくなつてきた。

不思議なもので、こちらが変なことをいったものだから、今にもなぐりそうに勢いこんでいた相手の方では、はぐらかされて手出しができなくなつたのだ。

「ああ、愉快、愉快」

正三は次第に得意な氣持になつて、ひとりごとをいった。

（庄野潤三『ひばりの子』）

（注） * 詰んでいた〓立て込んでいた。

* 地所〓土地。

問18・問19 波線部①「不服らしく」、②「断固として」の意味として、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選びなさい（①は問18、②は問19の解答欄にマークすること）。

①「不服らしく」

- 1 困ったように
- 2 逆らうように
- 3 不思議そうに
- 4 不満そうに

②「断固として」

- 1 断りきれない様子で
- 2 はっきりとした様子で
- 3 強がっている様子で
- 4 怒っている様子で

問20

傍線部(1)「正三は、思わず身体に力が入った」とあるが、この時の「正三」の気持ちとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 いかに危ない感じで飛ぶひばりを応援する気持ち。
- 2 ひばりが落ちたらすぐに助けに行こうとする気持ち。
- 3 たよりなく飛ぶひばりを叱りつけるような気持ち。
- 4 ひばりと同じようにうれしくてたまらない気持ち。

問21 傍線部(2)「お父さん、お母さん、もうこのくらい飛べば、及第でしょう」とは、どういう意味か。その内容として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 死にそうになるほど飛びまわったので、お父さん、お母さん、ぼくは落下してしまいそうです。
- 2 黒い粒に見えるほど高く飛び上がり、今度は急降下する技を、お父さん、お母さん、見てください。
- 3 空をある程度飛び回ることができ、初めての飛行としてはお父さん、お母さんも満足したでしょう。
- 4 お父さん、お母さんと同じくらい広い空を飛び回り、ぼくは十分満足したのでもう着陸しますよ。

問22

傍線部(3)「正三は怒った」とあるが、その理由として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 男の子が、初めて空へ飛んで戻ってきたばかりのひばりの子に石を投げるといふひどいことをしたから。
- 2 男の子の投げた石が自分の目の前へ落ち、もしも石が自分に当たれば大けがをすることだったから。
- 3 男の子が、農作業の準備の済んだ場所に石を投げ、土地の持ち主を困らせるようなことをしたから。
- 4 男の子がひばりに向かって石を投げ、自分のひばりを捕まえようとしていた正三の邪魔をしたから。

問23

傍線部(4)「相手の眼が光った」とあるが、この時の「正三」と「男の子」の様子の説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 正三は年上であるらしい相手に対して攻撃的になり、なんとかしてひばりを自分のものにしようとしている。一方、男の子は年下に見える正三に対して自分が先に見つけたひばりだと主張している。
- 2 正三は相手が年上であるらしいと気がつき、喧嘩をせずにこの場を収めようと思っている。一方、男の子は年下に見えるのに臆せずにご飯を食べてかかってきた正三を警戒して、その動きを見守っている。
- 3 正三はひばりをかばうあまりに年上であるらしい相手に対して命令口調で注意してしまったことを後悔している。一方、男の子は年下に見える正三が自分のことを恐れていることを見抜いている。
- 4 正三は年上であるらしい男の子に対する恐怖を隠して、なんとかひばりを守ろうとしている。一方、男の子は自分の行為を年下に見える正三から再び注意されたことを腹立たしく思っている。

問24

本文の内容と表現の特徴を説明したものとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 妹や弟の面倒をよくみる、正義感の強い正三という男の子の姿を中心として描かれている。一文一文は長いが難しい漢語が少ないので、やわらかな平易な印象の文章となっている。
- 2 春の日の穏やかな情景を背景に、正三に起きたひばりを巡る小さな出来事が描かれている。「ような・ように」などの比喩や「ずんずん」などの擬態語が効果的に使われている。
- 3 正三が優しい母、厳しい父、幼い妹・弟と暮らす日常が、周囲の田園風景を交えて描かれている。会話が多用され、それぞれの人物像を具体的に浮かび上がらせる役割を果たしている。
- 4 ひばりの子の巣立ちを題材として、それを見つめる少年二人の異なる姿が中心に描かれている。正三の目を通して擬人化されたひばりの子の描写が、正三の優しさを伝えている。

四

次の短歌と俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

【短歌】

- A 金色こんじきのちひさき鳥のかたちして銀杏いちょうちるなり夕日の岡に
 B 街をゆき子供の傍そばを通る時蜜柑みかんの香かせり冬がまた来る
 C 草わかば色鉛筆の赤き粉このちるがいとしく寝ねて削るなり
 D つばくらめ空飛びわれは水泳ぐ一つ夕焼けの色に染そまりて

与謝野晶子
 木下利玄
 北原白秋
 馬場あき子

(注) *つばくらめ||つばめ。

【俳句】

- a つきぬけて天上の紺曼珠沙華まんじゅしゃげ
 b どの子にも涼しく風の吹く日かな
 c 桐一葉きりひと日当りながら落ちにけり
 d 夕立やお地藏さんもわたしもずぶぬれ
- 山口誓子
 飯田龍太
 高浜虚子
 種田山頭火

(注) *曼珠沙華||彼岸花のこと。

問25 AとBの短歌の句切れは同じである。何句切れか。最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 初句切れ 2 二句切れ 3 三句切れ 4 四句切れ

問26 AとDの短歌に共通して使われている表現技法として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 直喩 2 倒置法 3 擬人法 4 反復法

問27 Cの短歌の傍線部「寝て削るなり」とあるが、作者はなぜこのようにするのか。その理由として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 色鉛筆を削りながら、若草の爽やかな香りをかこうとして。
2 色鉛筆の粉を下に落として、美しい若草を汚すまいとして。
3 若草と色鉛筆の、色の美しい対比を間近に感じようとして。
4 色鉛筆の赤色を、やわらかな若草に触れつつ見ようとして。

問28 次の鑑賞文に当てはまる短歌として、最も適切なものを一つ選びなさい。

*命あるもの同士の一体感を、同じ光に包まれる様子で表している。字余りの句が韻律をわずかに破り、感動を印象付けるアクセントとなっている。

- 1 A 2 B 3 C 4 D

問29 a・cの俳句は同じ季節を詠んだものである。その季節の季語として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 名月 2 滝 3 風 こがし 4 菜の花

問30 aとdのうち、切れ字の使われていない俳句として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 a 2 b 3 c 4 d

問31 dのような俳句を自由律俳句というが、これに属する俳句として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 襟巻の狐の顔は別に在り えりまき きつね
2 叩かれて昼の蚊をはく木魚かな たたか
3 水枕ガバリと寒い海がある もくぎょ
4 春の山のうしろから煙が出だした

問32 次の鑑賞文に当てはまる俳句として、最も適切なものを一つ選びなさい。

*自然に向かい客観写生をしている。一瞬の情景をスロービデオのように描き、明るさの中に、この季節のそこはかとない寂しさを感じさせている。

- 1 a 2 b 3 c 4 d

五

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

匡房*まことふさの中納言は、大宰*だざいの権帥*ごんそうになりて任におもむかれたりけるに、道理(1)にてとりたる物をば舟一艘さうに積み、非道にて取りたる物をばまた一艘に積みてのぼられけるに、道理の舟は入海してけり。非道の舟はたひらかに着きてければ、江帥かうそういはれけるは、一世(3)はやくするゑになりたり。人いたく正直なるまじきなり」
x(4)。それをさとらんがために、かく積みてのぼせられけるにや。昔なか比ひだにかやうに侍りけり。末代よくよく用心あるべきことなり。

〔古今著聞集〕

(注)

* 匡房わおえの 大江匡房(一〇四一―一一一一)は平安時代後期の貴族。漢詩人・歌人。江帥かうそうと称す。『江家次第』『本朝神仙伝』などの著者。
 * 大宰の権の帥 大宰府の長官である「大宰帥」の次位の官で、大宰府統督を代行する役目を負った。

問33 傍線部(1)「道理にてとりたる物」の意味として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 正当な手段で入手した物。
- 2 赴任地で取得した物。
- 3 土産として与えられた物。
- 4 理由があつて奪った物。

問34 傍線部(2)「のぼられけるに」の現代語訳として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 都におもむかれたところ
- 2 川をさかのぼられたところ
- 3 大宰府に向かわれたところ
- 4 港に向かわれたところ

問35 二重傍線部「し」と同じ意味・用法の例として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 折しも雨が降りはじめたところだ。
- 2 予想に反して優勝した。
- 3 話していた時に電話が鳴った。
- 4 彼の名を世に知らしめた発明だ。

問36 波線部「いはれけるは」は「おっしゃったことには」と訳し、続く発言の後の空欄部Xには、「し」のこととした」と訳される語句が入る。その語句として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 とぞ侍りけり
- 2 とや侍りけり
- 3 とぞ侍りける
- 4 とや侍りける

問37 傍線部(3)「世はやくするにたりたり」には、「匡房の中納言」のどのような気持ちが表れているか。最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 世間の目を後ろめたく思う気持ち。
- 2 新しい時代が来てほしいと思う気持ち。
- 3 救いのない世の中になったと嘆く気持ち。
- 4 将来が一体どうなるのか心配する気持ち。

問38 傍線部(4)「それをさくらんがために」とあるが、「それ」の具体的な容として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 たとえ大宰の権の帥であっても、自然災害を避けることはできないということ。
- 2 正しい行いを心がけていても、時には不運に見舞われることもあるということ。
- 3 法律に違反した行いをした人間に、幸運が訪れることがあるかということ。
- 4 天罰が下るはずの行いも、見過ごされるようになってしまったということ。

問39 本文の内容と合致するものとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 語り手は、匡房の例を示して、その賢さを示すとともに、自分たちも同じ失敗を避けるために用心しなければいけないと忠告している。
- 2 語り手は、匡房の例を示して、同じような危険は自分たちの時代にもますます増えるだろうから、用心をしなくてはいけないと教えている。
- 3 語り手は、匡房の例を示して、匡房が生きていた頃からさらに時代の下った現在では、なおさら用心をしなくてはならないと警告している。
- 4 語り手は、匡房の例を示して、昔の出来事ではあるものの、念のため時代の下った現在でも同じ用心を怠ってはいけないと戒めている。

